

報告事例－1

森林環境教育（森林E S D）プログラム分析シート

プログラム名：「河内小学校 学校林活動」		NPO法人里山倶楽部 河南町立河内小学校		
(1) プログラムの目標	里山倶楽部 地元小学校への環境教育（E S D）支援を通じ地域へ貢献し、里山への理解を広げたい。 河内小学校 自然あふれる里山での体験学習を通して、子どもたちが森や山を守る人々と出会い、自己の生き方を考えるようになってほしい。			
(2) プログラムの概要	3年から6年の4学年、4月から3月までの1年間を通じて活動。 学習指導要領に関連したテーマを各学年で設定。 3年：自然と親しむ、4年竹・昔の暮らし、5年田んぼ・食、6年間伐・木の暮らし 3年（4回）1学期／自然と親しむ春編、夏編 2学期／秋編 3学期／冬編 4年（3回）1学期／竹林整備 2学期／竹食器、竹飯づくり 3学期／竹炭づくり 5年（3回）1学期／田植え、田草取り 2学期／稲刈り 6年（3回）1学期／間伐・皮むき 2学期／間伐材で学校林整備 3学期／記念植樹 学校の授業で事前授業、事後授業を実施。			
(3) プログラムの展開				
活動内容について、プログラムの流れで、記載する。 合わせて、段階的な学びとして、3つのタイプのアクティブ・ラーニング（in、about、for）の視点で活動内容を区分してみる。 ・ in（～の中で）－ 体験、観察、製作など（関心・意欲、知識・技能） ・ about（～について）－ 情報収集・分析、情報交換、討論など（知識・技能、思考・判断・表現） ・ for（～のために）－ 提案、実践など（態度、参加・行動）				
時間数	プログラムタイトル			
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）		
	in、about、for の視点で活動内容を区分			
14	3年 自然と親しむ			
	・「身近な自然と親しもう」 ＜春編校内＞ ・「学校林と親しもう」 ＜夏編＞＜秋編＞＜冬編＞ 事前授業、事後授業（左記時間数外）	学校林に入る前に、校内の身近な自然に目を向けたり、人と人、人と自然とのつながりに気づく。 学校林で自然体験ゲームを通じ、季節による違い感じ、学校林と親しむ。		
	in－自然、森林に関する関心・意欲を高める。			
10	4年 竹・昔の暮らし			
	・竹林整備 ・竹食器、竹飯づくり 事前授業、事後授業（左記時間数外）	実際に竹を伐採する体験を通して、竹そのものや里山における竹林の状況を学ぶ。 竹食器や竹飯、竹炭づくりを通して、竹の利用、里山の文化、暮らしを学ぶ		
	about－森林や森林文化についての知識・技能を学ぶ。			
8	5年 田んぼ・食			
	・田植え ・田草取り ・稲刈り （作って食べる） 事前授業、事後授業（左記時間数外）	田植え、草取り、稲刈り体験を通して、里山、森林の理解を深める。食について考える。		
	about－里山、里山文化についての知識・技能を学ぶ。			
10	6年 間伐・木の暮らし			
	・間伐、皮むき ・間伐材による学校林整備 ・記念植樹 事前授業、事後授業（左記時間数外）	木を切る、皮をむくという体験から、木の命を実感する。林業についても身近に感じる。 間伐した、された材を活用し、物づくりに挑戦する。 体験を通じ循環型社会について考える。 学校林活動、4年間の締めとして、記念植樹により、卒業後も学校林の学びを思い出せるようにする。地域の緑化という形でも貢献する。		
	for－森林整備、木材工作、植樹を実践。地域貢献も実践する。			

(4) プログラムでの連携内容

(教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容)

- 河内小学校 3、4、5、6年学校林活動の実施、事前事後授業、全般的な安全管理。
- 里山倶楽部 事前準備と当日の運営指導、現場プログラムにおける安全管理。
 3年 自然体験 担当：里山キッズクラブ事業部
 4年 竹林整備・竹食器竹飯・竹炭 担当：里山事業部
 5年 田んぼ 担当：自然農場
 6年 間伐、間伐材利用、記念植樹 担当：里山事業部
 茶ノ木原学校林の保全・管理 担当：弘川寺千年の森
- 葛城平八（地元農家） 田んぼ体験の受入れと稲の育成管理。

学習指導要領との関連 (例 小学校)

1年	生活：身近な自然の観察、利用
2年	生活：生き物を育てる、成長
3年	社会：飲料水、地域の生活 理科：昆虫と植物（自然の観察、植物を育てる）
4年	社会：都道府県の様子・生活 理科：季節と生物（身近な植物の成長、季節による違い）
5年	社会：国土の自然・環境、国土保全 理科：植物の発芽、成長、結実
6年	社会：歴史上の事象、文化財 理科：生物と環境
総合的な学習	横断的・総合的な課題の学習、社会体験、討論・発表
特別学習	遠足・鑑賞、集団活動・生活

森林環境教育の視点

1 感性的経験	感性的な内容 — 森林の感覚的把握や美的把握、畏敬の念など
2 自然的特性	森林の自然的特性に関わる内容 — 植物や動物の生態など
3 多面的機能	森林と人とのかかわりに関する内容 — 森林の働き、保安林など
4 現状・課題	森林の現状に関する内容 — 森林の荒廃、人手不足など
5 管理・維持	森林の管理・維持に関する内容 — 森林整備、育成、維持、管理など
6 歴史・文化	森林とのかかわり方の歴史 — その土地での歴史、薪炭林、炭焼き

(5) 活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位3項目

教科・項目、視点		学習内容
自然的特性	植物や動物の生態を知る 自然の変化に気付く	3年：自然と親しむ 校内にある植物など生き物に興味を持ち、校区内にある学校林に範囲を広げる。4年間行うさまざまな自然体験活動の出発地点として、自然を身近に感じるために春・夏・秋・冬の自然の移りかわりを通して学んでいく。
管理・維持	森林の役割を学ぶ 間伐の意味 効率的な製作の工夫	6年：木・ものづくり 理科で学ぶ森林の役割について、校区内の山、法面の間伐を通して学んでいく。間伐した材をもとに、製作の計画を立て、グループや個人での卒業制作（環境整備）を行っていく。
歴史・文化	竹の性質を知る 竹炭の利用	4年：竹・昔の暮らし 竹の性質を学んだ後、学校林にある窯（千年窯）で炭焼きを行う。身近な日常生活でも竹炭が利用されていることを知り、炭の消臭効果や工芸品などとして利用されていることを学ぶ。窯に入れた後、卒業前に子どもたちは持ち帰り、活用する。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)									
E S Dの要素 (生きる力)	能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度					
		2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つなぐを尊重する態度					
		3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度					
		4 コミュニケーションを行う力							
資質・能力 三つの柱	①生きて働く「知識・技能」の習得								
	②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成								
	③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養								
次期学習指導要領では、持続可能な開発のための教育 (E S D) 等の考え方も踏まえつつ、「生きる力」とは何かを、「資質・能力」(三つの柱)に沿って具体化するとしています。 活動を、三つの柱の項目に再整理して記載してください。(該当がない項目は空欄)									
項目	E S Dの要素(7つの能力・態度)の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。								
①生きて働く「知識・技能」の習得	「進んで参加する態度」 4年：竹・昔の暮らし 校舎付近にも竹林があり、子どもたちにとって身近な竹について調べ学習をする。「なぜ?」「どうして?」と竹に関する疑問を持たせた上で、活動に取り組ませることで、より主体的な深い学びとなり「知識・技能」の習得につながる。その学ぶスタイルが5年、6年にもつながり、近くの自然について自ら調べ、参加しようとする態度の育成につながる。								
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	「コミュニケーションを行う力」 3年：自然と親しむ 校内の身近な自然や学校林の自然のうつりかわりの様子から個人で感じたことをペアやグループでことばで表したりや作品として表現したりすることで、他者理解をすすめることができる。また、複数の子どもと協力しようとする協調性が身につく。学んだことをまとめる・振り返る活動を通して、相手を意識した表現力の育成につながる。								
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	「多面的、総合的に考える力」 6年：木・ものづくり 森林の役割を理解し、間伐の意義を通して身近な生活に生かす工夫を感じる。4年間の学校林活動の中で、他の学年の子どもが学びやすい環境を整備することで、豊かな人間性の構築を行う。								
(7) 実施後、参加者の変化									
・自分たちの知らない校区、自然のよさを感じることができている。 ・教職員も改めて、自然体験、森林体験、校区のよさを感じている。 ・教科書で学ぶ内容を体験を通して経験することで、深い学びにつなげている。 ・活動ごとの振り返り、まとめ活動を通して、他者への発信する力が身についてきた。 ・実際に木材・竹に触れることで、加工されるまでの資源価値を認識し、自然環境保全の意識が高まった。 ・工具を用いる経験が多いため、図工の工作では、率先し工具を用いようとする姿が見られるようになった。									
(8) プログラムの今後のめざす方向・展開									
・E S D及び森林環境教育(森林E S D)の一層の社会化を受け、学校、N P Oの状況にあった定期的なプログラム改訂により、持続可能な取り組みとして継続 ・新学習指導要領に沿った活動内容、意義の見直し ・近隣の学校への取り組みの発信									
(9) 現状での課題、質問事項など									
・2019年度の河南町学校統合(別の2校が河内小学校に統合)による児童数の増加等の課題の克服 ・E S D及び森林環境教育(森林E S D)に対する、学校側(教育委員会、教職員、保護者)及びN P O側(会員)の理解促進、実施への継続的な努力 ・異動・新任教職員への学校林活動の意味の確認 ・プログラム実施における予算の確保									